

「風景」から農業を語ろう

評 宇根豊 (福岡県糸島市・百姓)

真田さんは「石積み学校」を主宰する大学教授だ。考える姿勢がきっぱりとしていて、常に自分の気持ちと照らし合わせて書いている。

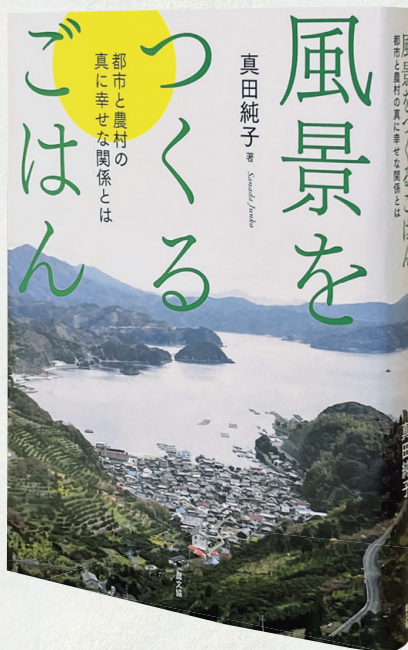
さて、車は自動車工場で生産される。「工場にはどんな生きものがいて、どんな風景の中で生産されたの?」と尋ねることは無意味だろう。ところが食べもの(農産物)は、ここがとても重要だ。EUは、ここに政策の理念を見つけたから、百姓の所得の7〜8割を税金から支援できているのだ。

日本でも風景を支える農業政策を実現させたい。そのために真田さんは、風景が傷口を見せてしまう「石積み」(石垣)に着目する。イタリアではずいぶん前から、石積みを守ることが政策になっている。日本よりもEUの百姓の取り

組みのほうがはるかに面白い。風景にも大きな差が出てくるはずだ。相も変わらず「儲け」と「競争」から脱却できない日本農政下では、アゼをコンクリートにしても、除草剤をかけても助成金が出るのだから。

私たち日本の百姓にも責任がある。時代は変わり、風景や環境を語ることが求められているのに、経済価値以外の価値を「語る」習慣を失ったままだ。真田さんは、このことをきちんと指摘している。いい学問をしている。

ごはん(食べもの)と風景(自然環境)をつなぐために、どういう着想(理論)とどういう語り(表現法)が必要かを、必死で考えている。とくに「石が技術を選ぶ」「土地が積み方を決める」というような「語り」が、人の心に響く



『風景をつくるごはん』 都市と農村の真に幸せな関係とは』

真田純子 著

農文協 2200 円 (税込)

時代を迎えている、と私も思う。石積みの石も、その石の間から生えている草も、その草に止まっている虫も、そしてそれらにふと目をとめた百姓も、つながっているという感覚を取り戻せば、石積み風景もまた生きものとなり、消費者への「語り」も胸を打つことができる。

きっと、私たち「小さきもの」の「小さな行動」がつながって、やがてこの国の社会システムも変わるにちがいない。